

攝津大掾を語る鶴澤清八

安 原 仙 三

「結構なレコードを聞かして頂きました。大掾師匠に三十年振りに會ふ様な氣が致します。難有う御座りまし

た」
と鶴澤清八師（二世）は幾度も攝津大掾吹込の十種香レコード（三味線絃阿彌廣助）を押し頂くのであつた。今一度かける。清八師の興奮した顔は若者の様に電燈の光に輝く。小首を傾けてじつと聞き入る姿は名工の彫刻の様に靜かであつた。

「いやもうこんな結構なレコードは萬年後迄も出来るものでは御座りません。どうぞあなたはんぽんと大切にしておくんはなれや。寶物にしておいておくんなはれ。割れぬ様にかねの箱にでも入れたいとおくんはなれや。ようまあ大切にして呉りやはりました。難有う御座りました。忝う御座りました」

清八師の額には汗が滲んでゐた。

「あなたはん、何でも朱を取らせて頂きます。大掾師

匠は斯道の神様で御座ります。お聞きになつてお分りやろけど、勝頼、濡衣、八重垣姫どれ一つとして作つてゐやありません。皆その人になり切つてゐやります。人の氣附かぬ語り口がついとります。私も勉強やと思ひますによつて是非朱を取らせて頂きます。そりや調子のいんだ處も確かに御座ります。大掾師匠は晩年耳が少し遠うなりやはりましたので、それで調子がいんだのやなと思ひますが、調子が極つたらすぐ乗つとります。これは調子を探ぐつてゐやはるので御座ります。此の調子のいんだ處があるので此のレコードは出来がよくないと云ふ人があるのやと思ひますが、それより好い處の方が何ぼ多いやら分りません。悠々と落附いたもんです。私も度々レコードに入れた經驗が御座りますがあんなに落附いて語れるものでは御座りません。氣が忙しうて一面の終り頃になるとその方に氣を取られて了ひます。大掾師匠なればこそこんなに落附けるのやなと思ひます。朱を取

つてから一々あんださんに一々お話し申上げます。どうぞもう一べん聞かしとくんはなれ」

丁度その時々食時間になつたので盃を差すと一寸口にした丈で、何か思ひ出した様に清八師は急に止めて了つた。

「こんな結構な大掾師匠の十種香を酒を頂いて聞いたとあつては申譯が御座りません。勿體のう御座ります。もう頂きません。どないに仰言つても頂きません。頂くなら後にしておくんはなれ。どうぞそれは堪忍しておくんはなれ」

と固く辭して受けぬ。永年文樂で苦勞した人なればこそ此の氣持になるのだと思つて差すのを止めた。食事も清八師は大掾の語り口や十種香の事を話して呉れた。

「私が鶴太郎時代の事で御座りました。南部太夫さんと稽古して貰ひに伺つた事がありました。朝行きました處お家はんにお師匠さんがお稽古中やからと云はれましたので朝早くからどなたのお稽古ですかと尋ねましたら今十種香のお浸へ中やと云はれました。南部さんと一緒に思はず「えー」と云つて吃驚して了ひました。大掾師匠の十種香と云つたら二枚札のものです。それをこんなに御勉強してゐはつたので御座ります。大掾師匠はおなくなりになる迄御研究を積みやりました。その證據は

ちやんとこのレコードに残つとります」

食事終ると清八師は、懷中より白紙を取り出し筆を取つた。ちやんと坐り直して床へ上る時の様な眞剣さになつて用意した。レコードをかける。清八師の筆は左右忙しく動く。朱がどん／＼記されて行く。速記者の様に早い。若者の様な氣魄だ、魂を打込む。成程文樂の研究はこれだなどじつと見守つた。六面聞き終つてぼつとした。清八師の緊張から解放された安心であつた。

「あんだはんどないに思やりますこの處。仲々こうは語れません。まるで人と反對だす。」

と云つて

『合點の行かぬと差うつむき』

の處語つて聞かせて呉れた。成程と感心する。

『切腹ありしその日より』

の處獨りで卓を叩いて獨り言に成程、成程と驚喜する。私にはとんと分らぬ。

「こう人になり切れません」

と濡衣の

『廣い世界に誰あつて』

の處何度も眞似して聞せて呉れる。

「廣いと押へて世界とすーと持つて行かれるのでほんとに世界が廣くなつてゐます。誰でもそこ迄考へずに唯

濡衣の言葉丈語るものですが、大掾師匠のを伺ひますとこれ丈情が出て御座ります」

と濡衣の身振りし乍ら又廣い世界にと語り出す。ほんとに楽しさうだ。

「何でもない處にこれ丈のお工夫がおますのや」と云つて

『我身代りに相果し』

の『相果し』を説明して呉れる。義太夫の深さをつく／＼感心する。

「まあもう一べんよう考へさせて貰ひます。これはいつもの大掾師匠とは確かに語り口が違つとります。家に大掾師匠の朱が御座りますのでよく比べて見ます。レコードと云ふ物は後世残るものやさかい大掾師匠は一番好い十種香を語られたのやと思ひます。新しい御研究の十種香やと思ひます。私達今迄語つてゐた十種香を之れから改めます。これが一番好い十種香です。一番ほんとの十種香です。之れから此の十種香で稽古する事に致します。私もお蔭でえらい得しました。大掾師匠のお教へ通り私達も死ぬる迄勉強せんとなります。斯道の奥は深う御座ります」

餘り感激が大きいので疲れが出ては氣の毒とその晩は他のレコードで氣分の轉換をはかり、お預けの酒も差し

た。此度は師も快く口にして藝談に夜の更けるのを忘れて了つた。

翌日朝早く會社へ清八師から電話がかゝつて來た。

「昨夜はとんだ長居致しまして、誠に忝う御座りました。歸りましてからもう大掾師匠の事が思ひ出されて一晩中寝られませんでした。昔の鶴太郎時代に歸つた様な氣が致しまして胸一杯になりました。何でもあんたさんにお禮申さんならんと思ひまして起きるなり電話申上しました。昨晚歸りまして御手紙を書きましたので、どうもまあ字も下手糞ですし呆けてゐましたさかい何を書いてるやら分りませんやろけど私の氣持一杯の事ですよつて讀んどくんはなれ」

と鄭重に禮を云つて來た。その手紙は今手許にある。清八師の師思ひの熱情を記した貴重な文献として大切に永く保存する積りでゐる。

尙同夜は文學士吉永孝雄氏も同席されてゐた事を附言する。(昭和十七、十一、十六)